

(22) 未成熟ソラマメ
ア 殺菌剤

| 農 薬 名 | 成 分 名 | 系 統 名 | FRAC コード | 適 用 病 害 虫 名 | | | | | | | | 注 意 事 項 | |
|--------------|----------------|-----------|-------------|-------------|-----------|-------|-------|-----------|-----------|-------|-------|----------------|----------------|
| | | | | 疫 病 | 赤 色 斑 点 病 | さ び 病 | 立 枯 病 | 苗 立 枯 病 R | 灰 色 か び 病 | 茎 腐 病 | 菌 核 病 | | |
| アフェットフロアブル | ベンチホラト | アミト | 7 | | | 未マ | | | | 未マ | | 未マ | 未マ：【豆類（未成熟）登録】 |
| アミスター20フロアブル | アゾキシストロビン | ストロベリリン | 11 | | | ◎ | | | | | | | |
| オンリーワンフロアブル | テブコナゾール | SBI | 3 | | | ◎ | | | | | | | |
| カナメフロアブル | インピルフルキサム | その他 | 7 | | | ◎ | | | ◎ | | ◎ | | |
| カリグリーン | 炭酸水素カリウム | 無機殺菌 | NC | | | 野 | | | 野 | | | | 野：【野菜類登録】 |
| カンタスドライフロアブル | ホスカリト | アミト | 7 | | ◎ | ◎ | | | | | | | |
| ジマンダイセン水和剤 | マンゼブ | 有機硫黄 | M03 | | | ◎ | | | | | | | |
| スクレアフロアブル | マンデーストロビン | ストロベリリン | 11 | | | | | | 未マ | | 未マ | 未マ：【豆類（未成熟）登録】 | |
| セイビアーフロアブル20 | フルジホキシニル | その他 | 12 | | | | | | 未マ | | | 未マ：【豆類（未成熟）登録】 | |
| タチガレン液剤 | ヒドロキシイソキサゾール | その他 | 32 | | | | ◎ | | | | | | |
| ニマイバー水和剤 | ジエトフェンカルブ・ベノミル | 混合剤 | 10・1 | | | | | | 未マ | | 未マ | 未マ：【豆類（未成熟）登録】 | |
| パレード20フロアブル | ピラジフルミト | その他 | 7 | | | | | | 未マ | | 未マ | 未マ：【豆類（未成熟）登録】 | |
| ファンタジスタ顆粒水和剤 | ピリベンカルブ | ストロベリリン | 11 | | ◎ | ◎ | | | ◎ | | ◎ | | |
| ベンレート水和剤 | ベノミル | ベンゾイミダゾール | 1 | | | | 未マ | | | | 未マ | 未マ：【豆類（未成熟）登録】 | |
| リゾレックス水和剤 | トルクロホスメチル | 有機リン | 14 | | | | | ◎ | | ◎ | | | |
| リドミルゴールドMZ | メタラキシルM・マンゼブ | 混合剤 | 4・M03 | ◎ | | | | | | | | | |
| ロブラール水和剤 | イプロジオン | ジカルボキシイミト | 2 | | ◎ | | | | | | | | |

注) 苗立枯病の対象病原菌の表記 R: Rhizoctonia

エ 病害虫防除法（未成熟ソラマメ）

（ア）疫 病 *Phytophthora nicotianae*

（防除のねらい）

疫病菌は一般的に土壌中で越冬するとされている。本金の生育適温は30℃、最低12℃、最高36℃で、比較的高温で多雨時に発生が多い。葉に初め紫黒色の小斑点を生じ、葉縁に弧状の病斑を生じることもある。病斑境界は不明瞭である。やがて軟化腐敗し、晴天時には乾固する。茎や莢の発生も確認されている。

（耕種的防除法）

- （1）連作を避ける。被害の多いほ場の近くでは栽培しない。
- （2）陰湿地を避け、ほ場排水をよくする。
- （3）発病残渣をほ場に放置しない。

（イ）褐 斑 病 *Ascochyta fabae*

（防除のねらい）

種子伝染するほか、被害株に柄子殻の形で残り、翌年の発生源となるので、ほ場に残渣が残らないようにするとともに、種子消毒を行うことが大切である。

（耕種的防除法）

- （1）覆土が少なすぎないようにする。
- （2）排水をよくする。
- （3）収穫後の茎葉は集めて処分する。

（ウ）茎 腐 病 *Rhizoctonia solani*

（防除のねらい）

病原菌は被害植物とともに土壌中に数年間生存し土壌伝染するので、床土および本ほの土壌消毒が必要である。

（耕種的防除法）

連作を避ける。

（エ）さ び 病 *Uromyces fabae*

（防除のねらい）

主として夏胞子の形で越年し、早春の気温が15℃前後になると発病し始め、葉、茎、莢に発生する。施設栽培では年内から発生をみる場合もあるので、早めに薬剤散布を行う。

（耕種的防除法）

- （1）被害植物は焼却または土中に埋没する。
- （2）晩生種は発病が多いので、早生種を用いる。
- （3）カリ肥料を十分に施す。

（オ）赤色斑点病 *Botrytis fabae*

（防除のねらい）

被害植物に菌核の形で残り、12月から翌年3月頃にかけて感染した後発病する。薬剤防除は4～5月を重点に行うが、特に第1回目の防除時期が遅れないようにする。

（耕種的防除法）

- （1）密植を避け、排水をよくする。
- （2）カリ肥料を十分に施す。
- （3）収穫後の茎葉を処分する。

（カ）立 枯 病 *Fusarium avenaceum, F.oxysporum*

（防除のねらい）

病原菌は被害植物とともに土中に残り伝染するが、種子伝染もする。薬剤処理だけでは十分でないことがあるので、耕種的防除に重点を置く。

（耕種的防除法）

- （1）健全株から採種する。
- （2）連作を避け、排水をよくする。湿地では高畦栽培とする。
- （3）石灰ならびに堆肥を十分に施用する。

（キ）苗立枯病 *Rhizoctonia sp.*

（防除のねらい）

（耕種的防除法）

}] 茎腐病の項参照

(ク) 灰色かび病 *Botrytis cinerea*

(防除のねらい)

(耕種的防除法)

サヤエンドウの項参照

(ケ) てんぐす病 phytoplasma (MLO)

(防除のねらい)

病原はファイトプラズマでミナミマダラヨコバイが媒介する。マメ類のほか、ヒユ科、アカザ科、アブラナ科植物も感染するので、これらも含めて防除する。

(耕種的防除法)

発病株は見つけ次第抜き取る。

(コ) モザイク病 BYMV, BBWV, PSbMV, WMV, 萎黄病 MDV

(防除のねらい)

主な病原ウイルスはインゲン黄斑モザイクウイルス (BYMV) である。アブラムシによって非永続的伝染をし、土壌伝染はしないので、アブラムシの防除を徹底する。その他、ブロードビーコンウイルス (BBWV)、エンドウ種子伝染モザイクウイルス (PSbMV)、カボチャモザイクウイルス (WMV) があり、いずれもアブラムシによって伝染する。萎黄病はレンゲ萎縮病ウイルス (MDV) が病原ウイルスでアブラムシが媒介する。

(耕種的防除法)

(1) 発病株の早期除去に努める。

(2) シルバーマルチ等でアブラムシの寄生を回避する。

(化学的防除法の注意事項)

アブラムシ類の項参照

(サ) えそモザイク病 BBNV

(防除のねらい)

病原ウイルスはソラマメえそモザイクウイルス (BBNV) で土壌伝染を主体とし、種子、虫媒伝染はしないとされる。また、肥料不足、排水不良地などで発病が多い。地温が10℃以下になると感染発病が少なくなる。

(耕種的防除法)

(1) 発病したら3～4年間は他の作物を栽培する。

(2) 発病株は直ちに抜き除く。

(3) 高畦として窒素肥料を十分施す。

(4) 播種期をできるだけ遅くする。

(シ) アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ, ハナアザミウマ)

(防除のねらい)

(耕種的防除法)

サヤエンドウの項参照

(ス) アブラムシ類

(防除のねらい)

マメアブラムシ、ソラマメヒゲナガアブラムシ、モモアカアブラムシ、エンドウヒゲナガアブラムシなどが発生する。春季、ソラマメの生育が進むにつれて発生が多くなり、吸汁加害による生育障害が起こるので早めに防除する。ソラマメヒゲナガアブラムシの発生は稀である。アブラムシ類はモザイク病を媒介するので、発生初期の防除に努める。

(セ) ウラナミシジミ

(防除のねらい)

早採り栽培に発生し、花莢を加害するだけでなく、茎内に食入し、倒伏の原因になることもあるので、発生初期の防除に努める。

(ソ) ハスモンヨトウ

(防除のねらい)

サヤエンドウの項参照。

(タ) マメハモグリバエ

(防除のねらい)

サヤエンドウの項参照。

(チ) ハダニ類
(防除のねらい)

サヤエンドウの項参照。

(ツ) チャノホコリダニ
(防除のねらい)

ハウス栽培下の過乾燥な条件で発生する。生長点部分を加害されると生育が抑制されるので発生初期の被害を見逃さないように注意する。